

フランシスコ (パンチョ)・ピヤ

1910年10月17日、後に名前をフランシスコ・ピヤと改名するホセ・ドロテオ・アランゴはフランシスコ・マデロに呼応してポルフィリオ・ディアス政権転覆のため武器をとって立ち上がった。彼は数人とチワワ州サン・アンドレスにあるアシエンダ・チャバリアを攻撃し、アシエンダの主人とピヤの一人が命を落とし、メキシコ革命最初の犠牲者となった。パンチョ・ピヤはメキシコ革命の傑出したリーダーの一人として、彼の政治的、軍事的、社会的行動により、二十世紀におけるメキシコの歴史に決して消すことの出来ない痕跡を残した。そのため多くの歴史家、小説家、ジャーナリスト、民俗学者が、この粗野で精力的、カリスマ的な指導者に多くの時間と労力を傾けてきた。²⁰

パンチョ・ピヤの出生に関して謎が多いのは、彼が知られるようになる前、長い間無法者としてメキシコの北部を徘徊していたことに一つの原因がある。様々な説を総合すると、パンチョ・ピヤは1878年、ロペス・ネグレテ家が所有するドゥランゴ州最大のアシエンダ、ランチョ・デ・ラ・コヨタダで生まれた。彼の両親、アウグスティン・アランゴとミカエラ・アラムブラはこのアシエンダの物納小作人であった。後にフランシスコ・ピヤとして知られるようになる息子はホセ・ドロテオ・アランゴとして洗礼を受けた。²¹

歴史家ルーベン・オソリオは、これまでと全く異なる説を発表した。事の発端は1986年、オソリオがチワワ市の医師カマチョ・フェルマンから聞いた、信じられないような話からである。医師は自分の家族の言い伝えとして「フランシスコ・ピヤはオーストリア系ユダヤ人でアシエンダの所有者であった私の曾祖父ドン・ルイス・フェルマンの庶子である。ドン・ルイスは十九世紀の中ごろリヒテンシュタインからドゥランゴにやって来た」。オソリオはドゥランゴやチワワの州政府、村役場、個人の古文書をつぶさに調べ、ルイス・フェルマンの子孫をインタビューした結果、次のように結論した。

1830年、オーストリア系ユダヤ人ルイス・フェルマンはリヒテンシュタインから移民としてやってきた。彼はドゥランゴ州サン・フアン・デル・リオに住み、シエネガ・デ・ボソコという土地を購入した。彼はウルスラ・グロラと結婚し、三人の子供、ルイス、ホルヘ、カンデラリアが生まれた。ルイス・フェルマンとウルスラ・グロラの息子ルイス・フェルマン・グロラはサン・フアン・デル・リオで生まれ、一生をシエネガ・デ・ボソコで過ごした。彼はロサリア・ガルシアと結婚し、二人の息子ロサリオとミゲルをもうけた。二人はシエネガ・デ・ボソコで生まれ、サン・フアン・デル・リオのサン・フランシスコ・デ・ボソコ教会で洗礼を受けた。

1870年代、ルイス・フェルマン・グロラはシエネガ・デ・ボソコでメイドとして働いていたミカエラ・アラムブラと関係を持ち、1878年6月5日、男の子が生まれ、サン・フランシスコ・デ・アシス教会で洗礼を受け、ホセ・ドロテオ・アランゴと命名した。これらの情報を元に、ルーベン・オソリオはフランシスコ(パンチョ)・ピヤは裕福なアシエンダ

の所有者、ルイス・フェルマン・グロラとミカエラ・アラムブラ・デ・アランゴの間に生まれた庶子である、と結論付けた。²²

パンチョ・ビヤが語ったところによれば、彼の父親アウグスティン・アランゴは、ヘスス・ビヤという男の庶子であったという。アウグスティンは若くして亡くなり、残された妻と五人の子供は自分たちで遣り繰りしなくてはならなかった。ドロテオ・アランゴは長男で、一度も学校に行くことなく、家族を養うためにロペス・ネグレッテ家の農園エル・ゴルゴヒトで働いた。そうしたある日、農園主あるいはその息子、または管理人がドロテオの妹マルティナを手籠めにしようとしたため、ドロテオは銃をとって妹を助け、近くの谷間に逃げ込んだのは1894年9月22日、彼が十六歳の時であった。それ以来、彼は無法者となりドゥランゴの山中で警察に追われる生活をするようになった。数ヵ月後逮捕されると間もなく逃亡を企て、即座に射殺されると覚悟していたが、翌朝留置場を出され、トルティーヤの粉を挽く石臼を回す仕事を命ぜられた。彼は隙を見て石のすりこぎで看守を殴り、逃亡した。²³

一時期パンチョ・ビヤの秘書をした事のあるドクトル・ラモン・プエンテの伝記によると、ドロテオ・アランゴは盗みや殺しの手ほどきを山賊アントニオ・パラとレフヒオ・アルバドから受けたと言う。ドロテオは家族のルーツにちなんで名前をフランシスコ・ビヤと改めた。盗賊仲間は掠奪や盗みを重ね、僅かな間に五万ペソの分け前を手にしたビヤは一旦足を洗い、当時としては巨額の金を一年も経たずに使い果たしてしまった。ビヤは回想録で、五千ペソを母親、四千ペソを兄弟たち、残りは貧しい人に与えたと言った。無一文となり再び山賊に加わったビヤは、山野をさまよひ、官憲との撃ち合いを繰り返す生活に嫌気がさして、チワワ州に逃れる決心をした。²⁴

ドゥランゴ州境に程近いイダルゴ・デル・パラルの町で肉屋を開業したビヤは、ペトゥラ・エスピノサと掠奪結婚した。周囲の彼に対する評判は良かった。1910年ごろチワワ市に移り、そこでも肉屋を開業し、静かな生活を営んでいた。しかし自分自身が社会に不当に扱われたと思い、政府や法律は貧しい者を圧迫し、犯罪に追いやっていることに憤りを感じていた。²⁵

一方、家族の一人を殺されたことで、パンチョ・ビヤを恨み続けたセリア・エレラによるパンチョ・ビヤ伝記は、ビヤが無法者になったのは、彼の妹マルティナの名誉のためではなく、彼の友人であった少年を口論の末殺害したためであったとしている。彼の誹謗者にとって、ビヤは救う事のできない人殺し以外の何者でもなかった。²⁶

革命前のビヤの真実を明かすことは難しい。1901年から1909年までビヤは少なくとも四人を殺し、十件の放火、無数の窃盗、農場や牧場で数件の誘拐事件を引き起こしたと言われている。ドクトル・プエンテがビヤを真面目な肉屋であったとした1909年、ビヤはイダルゴ地区ロサリオの役所と古文書を焼き討ちした。1910年5月、サン・イシドロ農園に現れたビヤとその一味は、掠奪の後に主人とその息子を殺害した。10月、

ピヤと彼のコンパドレであるウルビナの一団はチワワ州ヒメネス地区にあるタラモンテス農場を強奪した。27

十八世紀のニュースペインの北部は、インディアン特にアパッチと戦うために軍人を入植させる植民政策が行われ、戦う準備の出来たものには土地を与えた。それはフアレス大統領の1868年に最大規模に達し、1886年を最後にアパッチの抵抗は収まった。世紀を超えて培われてきた暴力は、そのはけ口を失った。しかし、ポルフィリオ・ディアスの時代になり、新たな天敵が出現した。これ等の植民地から土地と牛を奪うアシエンダである。アシエンダのために牛の売買に関する法律が整備されたのをきっかけに、家畜泥棒が広まっていった。そして新たに、何でも暴力に訴えようとする風潮が根付くことになった。アシエンダの土地や、放牧されている牛の数は際限なく増えていった。これを地球規模で行われている不正行為と受け止めた地方の貧困層から中産階級の人々は、アシエンダこそ山賊であると考えようになっていた。太っ腹のピヤをメキシコのロビンフッドと呼ぶような社会的背景があった。28

当時の文書を幅広く詳細に調べ上げたフリードリッヒ・カッツは、これまでの伝記や回想録と全く異なるパンチョ・ピヤ像を引き出している。ディアス政権下のドゥランゴ州政府の記録にドロテオ・アランゴの名前が最初に現れたのは1899年1月のこと、二頭のロバと積荷の商品を奪った疑いにより逮捕された。彼は、逃亡を企てた廉で逮捕者を射殺することで知られている州警察の長官オクタビオ・メラスに引き渡され、二ヶ月の抑留の後に証拠不十分で釈放された。翌年3月8日、ドロテオ・アランゴはラモン・レイエスという男を襲って銃二丁を奪ったことで再び逮捕され、今度はそのまま軍隊に入れられた。しかしサンファン・デル・リオの村長は1902年3月22日、ドロテオ・アランゴが第二師団から脱走したこと、危険な山賊である故に同地区の警察当局に逮捕を命じたと知事に報告している。当時の正規軍や後に現れる革命軍では戦線離脱以外はかなり大目に見られていた。一兵卒としてではあったが、彼の軍隊経験は後の革命戦争に大いに役立った。29

これらドゥランゴにおける同時代の記録から、カッツはドロテオ・アランゴはパンチョ・ピヤ伝記・伝説と全く違う人物であったとして、ロペス・ネグレッテを傷つけて妹の名誉を救った一件についても疑問を投げかけている。当時は農園主が小作人やペオンの娘を手籠めにするのは日常茶飯事であったことから、農場主、その息子或いは農場の支配人を傷つけ、追われる身になった事実はなく、ドロテオが農場を去ったのは、そこに居たくなくなった些細な理由であったのではないかとカッツは考えている。ピヤがチワワ州に移動してからのことは彼の自叙伝の中で、自分は執拗に追い回される無法者で、チワワの中をあちこちと逃げ回った、と述べている。また、彼は州の指名手配者の筆頭で、彼の首には多額の懸賞金が懸かっていたという点では、彼自身も彼の敵も一致している。カッツはチワワ州ゲレロの市庁舎で、長い間手付かずのままであった古文書の中から、大いに参考になる報告書を発見した。それはマデラという小さな町の役人、エドワルド・カスティヨからゲ

レロ市長にあてた1910年6月29日付けの報告書である。パンチョ・ビヤは逮捕され、釈放されてから市長に苦情を申し立てた。市長はそのことに関してカスティヨに釈明を求め、それに対する回答は次のようなものであった。「・・・23日の夜、鉄道警備員ホセ・マリア・ガルシアがビヤを法律違反で留置場に入れた。およそ一時間後に釈放し、取り上げてあった225ペソを返却した。そして翌日拳銃も返した。ビヤにたいし刑罰や罰金は言い渡していない。我々は彼を丁重に扱っており、彼の苦情の根拠は理解できない・・・」この中でビヤが何をしたのかについては書かれていない、しかしいずれにしても軽犯罪であったのは間違いない。ビヤを逮捕した警備員はビヤに懸賞金が懸かっている事を知らなかったのか。もし官憲に追われていたら、ビヤは何故市長に苦情を申し入れたのか。1910年9月の時点でビヤは多くの人殺しをしたお尋ね者ではなかったことを、この文書は示していると言う。³⁰

パンチョ・ビヤは僅か二十八人を引き連れて革命に参加した。この記録は最初の会合を開いたアントニオ・ルイスが二年後の1912年11月に記した回顧録によるもので、これまでのパンチョ・ビヤ伝記・伝説にカッツは大きな疑問をなげかけている。ビヤが通り一遍の山賊で、何回も殺人を犯したのなら、このような責任感のある市民の会合で選ばれたのだろうか、とカッツは考えた。ビヤはカストロ・エレラの部下として、集まった男たちの四分の一の人数である二十八名の部下を与えられた、ということは、当時彼はアイドルでもなんでもなく、ビヤがテラサスに天罰を与えるために数千人の農民を引き連れて革命に投じたという話とは程遠いものであるとカッツは結論付けた。³¹

ビヤはマデロの再選反対運動のチワワ州委員長アブラム・ゴンザレスとの繋がりが出来た。このことを、彼の山賊仲間の一人であったクラロ・レサは政府に告発した。レサは逮捕されて以来情報の提供者となっていたばかりか、クレエルの秘密警察に加わり、ビヤに付きまとった。これを知ったビヤはレサの心臓を突き刺した、あるいは、酒場の前で馬上から射殺した、また、大通りでレサが女と歩いてくるのを、アイスクリームを食べながら待っていて、いきなり振り返って向かい合い、撃ち殺して平然として立ち去った、とも言われている。レサ殺しの時期については、1910年の終わりごろから1911年の初頭であった。ビヤがチワワ警察に指名手配され、執拗に追われることになった理由は、レサ殺しとタラマンテスのアシエンダをビヤと二十二人の男たちが金目当てに襲撃した為である。この二つの事件が革命と関係があったかどうか定かではない。これらの事件の前後にビヤはフェリシアノ・ドミンゲスを伴ってチワワ市にあるチワワ反再選党の事務所を訪れ、リーダーであるアブラム・ゴンザレスに会った。ゴンザレスは会見中メキシコの歴史をざっと教え、反再選党とマデロについて説明してから、革命計画への参加を促した。ビヤはこれを受け、それ以後人集めに奔走した。1910年ビヤ三十二歳のときであった。彼を革命に駆り立てたものは、オロスコが持っていた政治的野望ではなく、彼が一生持ち続けた憎しみと復讐の一念からであった。³²

チワワでの革命が勃発するやピヤの名声は高まった。彼は政府支持者と武力衝突をし、政府軍の正規部隊を破る最初のリーダーとなった。1910年11月17日、ラ・クエバ・ピンタでカストロ・エレラを中心とした集会の三日間、ピヤと十四人のグループは金、馬、物資調達のためチャバリア・アシエンダを攻撃し、抵抗した支配人を殺害した。集会の翌日、エレラとピヤの一団は古い軍事植民地であったサン・アンドレスを無抵抗のうちに占領した。その日ピヤは連邦軍がサン・アンドレスに向かっている、という知らせを聞いて駅に出かけ、部隊が降りるところへ発砲し、イエペス大尉と数名の兵士を殺した。このとき近隣の村からの参加者があり部隊は三百二十五人に増えていた。エレラはピヤの上官であったが軍事的才能がなく、ピヤは既に実質的なリーダーであった。³³

村々を抵抗なく占領し、連邦軍を撃退したチワワ革命軍は熱狂し、僅か五百人でチワワ市へ向かった。首府へ二、三マイルのところまで陣を張ると、エレラはピヤと四十人を偵察として発進させた。ピヤは二手に分け、三十人をエル・テコロテと呼ばれる丘の上に向かわせた。そこで彼等は七百の連邦軍が向かってくるのを見て無謀にも発砲した。三十分もしないうちに潰走寸前になったが一計を案じ、ソンプレロを丘の上にはずらりと並べて、革命軍を多勢と見せかけた。連邦軍がソンプレロに向かって弾薬を浪費している間に全員が逃れた。そこへ駆けつけたピヤと十人は勇敢ではあったが、無謀にも七百の兵に向かって挑んだ。ピヤの部隊は全滅寸前、加わった三十人に助けられ、一同無傷で撤退する事が出来た。このときエレラの本隊が戦闘に加わっていたら、連邦軍がチワワ西部山岳地帯に入るのを防げていたが、エレラは動かなかった。この時以来、ピヤとエレラの関係は悪化していった。³⁴

チワワで革命が勃発したニュースは世界中に報道された。偶々債務の支払条件を再交渉するためヨーロッパを訪問していた財務相ホセ・イーベス・リマントゥールは銀行や金融機関への支払条件を更に厳しいものにさせられた。ディアスは五千の援軍を派遣すると同時に、テラス＝クレエルの持つ力を十二分に利用するため、知事をホセ・マリア・サンチェスからアルベルト・テラスに挿げ替えた。アルベルトはルイス・テラスの息子で、クレエルの娘、つまり自分の姪と結婚していた。ディアスは取り返しのつかない失敗を犯した。大統領は反乱軍勢力を千五百名と想定し、五千の軍とテラス帝国の力で十分に反乱を平定できると考えた。

テラスは四つの柱を頼りに戦略を立てていた。彼らが任命した市町村長、自分たちの大農園で雇っている農民、彼らが面倒を見た軍事移民たち、最後にアシエンダの所有者であった。一部の市長は戦ったが、殆どは逃亡した。農民は戦うのを拒むどころか革命側に同調した。軍事移民たちもうまく逃げを打って頼りにならなかった。孤立したアシエンダは革命軍から要求されるままに物資を提供する有様であった。こうしてテラスの戦略は失敗した。³⁵

20. Ruben Osorio, "The Secret Family of Pancho Villa: An Oral History", Sul Ross State University of Texas, 2000, P1
21. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P2
22. Ruben Osorio, "The Secret Family of Pancho Villa: An Oral History", Sul Ross State University of Texas, 2000, P84
23. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P3
24. Ibid. P3
25. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P306
26. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P6
27. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P306
28. Ibid. P308
29. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P65
30. Ibid. P66
31. Ibid. P63
32. Ibid. P72
33. Ibid. P76
34. Ibid. P77
35. Ibid. P80

[目次へ戻る](#)